

何が偏ってるの？！

角 響子（介護支援専門員）

「福祉という言葉が嫌い」と川内先生がおっしゃった根拠を素直に捉えることができないと、日本は変わらない気がします。

講義終盤に先生から「私の講義は偏っているとかが過激と言われる・・・」ともありました。私にはその言葉が一番ショックでした。このようなご講義の内容を偏っていると捉える事自体が最も過激に偏った考え方ではないでしょうか。

私も7年程前、社会人大学生となってから障害の“害”という文字への疑問を感じるようになり、ひらがなで“がい”と表現してみたり、“碍”という文字を使って表現してみたりした経験があるのです。そのうちに、そもそも“障”という字も不快なものであることに気づきました。“

障”とは「さしつかえになる」とか「邪魔になる」という意味です。逆の立場となって考えると、“障害”という言葉そのものがただのレッテルだ！と感じるようになったのです。

レッテルとは、他人にしか貼ることはできないもので、しかも、一度貼られてしまうと、貼られた本人が剥がそうとするとすればするほど、過激だといわれたり、偏った発言、行動と捉えられてしまうのです。これが必然的な現象となっているのではないのでしょうか。

どれほど地域社会における共生を目指すにしても、その核心に視点が充てられないと、これから先も、ごまかされていくのではないのでしょうか？

マジョリティー達によって。

福祉現場に従事する者としての視点から、国の福祉施策で政府のニーズと国民のニーズのギャップこそが「低福祉高負担」を生み出しているのだと思っています。そして、その政府と国民との間で専門職として従事する私達が平然とそのギャップを広げているのです。

政府と国民の弱みにつけこんでいるのが私達社会保障分野の従事者であること、そして、日本人に民主主義という考え方そのものが、未だ順応できていないこともノーマライゼーションが文化となりようがない原因であることも否めないと思っています。

日本で福祉施策を検討される上で、いったい、いつまで“措置”という言葉が使われ続けるのでしょうか。言葉の意味は「しまつをつける」や「とりはからい」です。

政策を立案する上での責任感ゆえに表現され続けているともいわれているようなのですが、政策を検討されるスタート時点から対等性などないのだから、そこから、合理的配慮などなし得るわけがないとさえ感じております。

今日の私の一番の宝物は、講義の後の中華料理屋さんで川内先生から「合理的配慮」ではなく、「合理的調整」というお言葉をうかがえたことです。最も対等に感じられるお言葉でした。

対等性。

私たちはこれを常に意識し続けなければと思います。今のままでは、福祉施策を利用される方々とそうではないマジョリティー達との意識のギャップは途方にくれてしまうほどの大きさのように思えます。

川内先生。貴重なご講義を誠にありがとうございました。